

胆膵疾患以外に陽性例はなく、腫瘤形成性膵炎でも軽度上昇にとどまった。

悪性疾患では全体として33.3%の陽性率であったが、胆道系癌では92.3%と、CEA に比し有意に高い陽性率を示した。

手術前後の CA 19-9 の変動をみると、病態がよく反映されており、再発のモニタリングマーカーとしても有用であると思われた。

35. 大腸肛門管平滑筋肉腫について

岡田光生(社保中央)

過去25年間に、大腸肛門管平滑筋肉腫5症例を経験した。同期間の癌症例は793例である。40歳女性直腸、マイルズ手術18年後死亡。23歳男性直腸、局切、2年後マイルズ手術、4年後死亡。63歳男性S結腸、イレウス症状のため人工肛門術4月後死亡。47歳男性直腸、前方切除術2年後死亡。剖検例では、骨盤腔内の極度の膨張性増殖が特徴である。肝への転移も全例あった。マイルズ手術後3年生存している55歳肛門管男性の1例がある。

36. 当救急集中治療部に於ける菌血症例について

高橋一昭, 宇田川郁夫, 橘川征夫
渡辺 敏, 稲葉 英夫, 平沢博之
(千大・救急集中治療部)

当施設開設以来経験した菌血症例は男7名女5名の計12名で、16回菌が検出され、その頻度は全症例の1.4%に相当した。検出された菌の種類は、グラム陽性菌9例、グラム陰性菌5例、真菌2例で、いわゆる弱毒菌と呼ばれるグラム陰性桿菌や真菌は、入室後4日目以降に検出される傾向にあった。検出時ショックを合併したものは6名で、そのうち4名が死亡し、ショック合併の有無はその予後に重大な影響を与えられた。

36-1. 当院における透析療法の現況

山下純男, 横山 孝一, 内田朝彦
崎尾秀彦, 小田奈芳紀, 三宅和夫
(茨城県西病院)

当院における過去10年間の透析療法の現況を報告し、CRF に関しては、糖尿病性腎症患者や透析長期施行者の貧血対策、CAPD (持続的外来腹膜透析法) を紹介し、術後 ARF に関しては、できるだけ早期に透析を開始する必要性を述べた。

37. 内視鏡的イレウス管挿入によるイレウス治療

武田雄一, 田口 勝, 松山迪也
足立英雄, 宮原弘次, 四元徹志
小林一夫 (深谷日赤)

イレウスに対し非手術的解除を期待してイレウス管の盲目的挿入から、川村らの呈示した内視鏡的挿入を用い有効であった。

内視鏡的挿入の効果は、1イレウス管挿入の確実性。2挿入の迅速性。当院の平均解除は3.8日であった。3合併症が少ない。である。

問題点は絞扼性イレウスに対してで、当院でも無効例の手術所見で多い。イレウス管挿入のできないもの、先進しないもの、症状の改善しないものに緊急手術を行うべきである。

38. PTCS による総胆管結石摘出方法について

阿部弘幸, 諏訪敏一(大宮日赤)
平形 征(埼玉県立癌センター)

本来、総胆管結石症は外科的手術の適応疾患である。しかし本症例の如く、開腹術適応外の poor risk の総胆管結石症とか、肝内結石の非観血的治療法として、PTCC によりカテーテルを漸次太くしてゆき、そのカテーテル中より胆道ファイバースコープを挿入し截石を可能にした PTCS が新たな治療法として注目されている。

この様に、PTCS は全く外科的処置のされていない患者の胆道の内視鏡的検査ばかりでなく、治療的意義をも併せ持つものである。

39. 超音波による膿瘍診断及びガイドドレナージ

磯村勝美, 武藤高明, 大高和夫
山崎 武, 郡山春男 (国立柏)

腹部領域の膿瘍の内、肝膿瘍3例(アメーバ性肝膿瘍1例)、脾膿瘍1例、横隔膜下膿瘍2例を、主として超音波検査により診断し、肝膿瘍の2例、横隔膜下膿瘍2例は、引き続き超音波ガイド下にドレナージを施行した。

これらの症例を供覧し、超音波検査は膿瘍病変の診断上きわめて有効であること、また超音波ガイド下のドレナージも安全に施行でき、さらに膿瘍の治療効果の判定にも有用であることを検討、報告した。